

茶道ができるということ、 そしてその素晴らしさについて

山梨県立吉田高等学校三年（山梨県）

田辺 華子

私は、高校一年生の七月から茶道を始めた。部活動体験や、先輩からのアドバイスに接するという機会もなく突然入部した。その時のことを思い出すと、不思議な感覚にとまどいながらも、入部して良かったとホッとしている。

活動を振り返ると、コロナ禍で始まり、コロナ禍で終わった部活動だったと思う。初めての学園祭では、本来はお客様にお茶を点ててさしあげることができたはずなのに断念せざるを得なかった。頑張りを発揮する場が失われたのを残念に思っていた。けれどもそんな時、講師の先生宅で十月にお茶会を開くことが決定した。とても嬉しかった。お稽古のある日は、必ず先輩の手の動きや足の動かし方、目線などを見て学び、自分に実践できることから丁寧に取り組んだ。「二年生だからしょうがないよ」という何気ない先輩の一言が、より、負けず嫌いの私の気持ちに火を付け

た。今までの自分の努力が無駄になる。その一言が本当に悔しかった。それからの私は当日まで、仲間や先輩の素晴らしい点を全て吸収することに努めた。おかげで、誰よりも有意義に楽しい時間を送ることができた。そして自分の努力は正しかったと再確認できた。

実は私は、二年の夏に、ある部員と喧嘩をしてしまったことがある。原因は、お互いの意思疎通がうまくいかず、協調できなかったからだ。二年生の中盤にさしかかる所の喧嘩は、誰も予想していなかったことであった。それは点てられたお茶にも、所作にも影響を及ぼした。気が散ってしまい自分なりの茶道をつくりあげることができなくなってしまったのだ。私は、そこで初めて、茶道は心を落ちつかせ、自分と向き合いながら行われるものだと学んだ。喧嘩する前までは形だけの茶道、一連の流れを淡々と覚えるだけの茶道をしていた。しかし、お茶を点てることが自分と向き合うための大切な時間だと知って以来、茶道の歴史や文化をより深く学ぼうとする意欲につながった。「単なる茶道」が、「大好きな茶道」へと変化した。

三年生になって、一番のワクワクは、お菓子を選ぶ権利があることだった。友達と話し合っただけで決めたり、じゃんけんで決める時間がとても楽しかった。七月の七夕茶会のために三年生の自分ができることを、その都度考えて確認し、今まで以上に真剣に取り組んだ。自分からすすんで、

部長に土曜日の活動の許可を貰うこともあった。誰よりも茶道とその仲間のことが好きだったから、熱心に取り組めたのだと思う。無事にお茶会は成功し、最高の思い出となった。

最後まで私の高校生活に華を与えてくれた茶道はかけがえのないものだった。私の十七年間の生活の中で一番濃密でたくさん思い出を作れたのは「茶道部」である。辛くて悔しくて、でも時には楽しくて充実した部活動を送れたことは、奇跡だとは思っていない。コロナウイルスが蔓延していても、いなくても、私の部活動には関係がなかった。部員と先生方が元気の源だったからだ。ありがとうございますの思いを込めて。